

イムラ ヨーロッパの近況

The recent reports of IMRA EUROPE S.A.S.

戸嶋 裕基
Yuki Tojima

概要

欧州におけるアイシングループの研究開発拠点であるIMRA EUROPE S.A.S.の最近の活動状況を、フランス並びに欧州の文化的側面も交えながら紹介するとともに、今後の研究所の方向性についても述べる。

1. はじめに

IMRA EUROPE S.A.S.は、ニース空港から車で20分程に位置するフランスの研究学園都市であるソフィア・アンチポリスの一角に本社研究所を構える。

設立は1986年で30年以上の歴史があるが、故豊田稔名誉相談役が、当時エコールデミヌの学長であったラフィット氏（後に仏上院議員）から、フランスが世界に誇る学問と技術に関する研究学園都市として開発を進めていたソフィア・アンチポリスへの熱心な誘いあり、当時の（日本）通産大臣とフランス工業省との交渉の末、フランス政府からの認可を得たのが始まりと聞いている。伝統的文化と独創的発想による技術を有するフランスにおいて、アイシン精機が培ってきた自動車技術を、欧州企業・研究機関との共同開発等によってさらに発展させることを狙いに、後に豊田稔名誉相談役が構築された「IMRAプラン」の中で、特に科学・技術の科学＝サイエンスを重視し設立された。上記目的を踏まえた設立時の理念『科学と技術の調和的発展による社会への貢献』は現在も受け継がれている。

ちなみにIMRAの名前は、フランス語のInstitute Minoru de Recherche Avancée がその由来となる。

2. 現在の活動状況について

現在、当社はこのフランスの本社研究所（写真1）とイギリスのブライトン近郊のサセックス大学内にある英国研究所の2拠点で研究活動を展開する。どちらの研究所も数理科学をコア技術の柱に、地の利を活かした欧州研究機関並びに大学との連携を強化しつつ、先進材料や電磁気応用の研究を進めている。



写真1 IMRA EUROPE 本社

2019年度の活動の中で将来に繋がる取り組みとして、フランスの国立科学研究センターであるCNRS（Centre national de la recherche scientifique）との基本契約（Framework collaboration agreement）を締結を挙げることが出来る。調印式は10月17日パリのCNRS本部で執り行われた（写真2）。

CNRSは先進材料やAIさらには宇宙や原子力など多岐に渡る研究を手掛ける巨大な研究機関である。

そのCNRSが当社のような中小研究機関と基本契約を締結するのは初めての試みであり、当社がフランスの地で長年にわたりEUプロジェクト等の先端研究に携わってきた点が評価された結果である。この契約によりフランスを中心に1,100以上あるCNRS並びにその傘下の研究拠点へのアクセスや共同研究開始が容易となる。



写真2 CNRSとの調印式

また大学との連携も積極的に取り組んでいる。先進材料領域においては、フランスのエコールデミニヌパリテック(大学)やスウェーデンのリンショーピン大学と、また磁気応用領域においては、イギリスのシェフィールド大学やマンチェスター大学との共同研究を進めている。

また大学からの学生の受け入れも積極的に行っており、Ph.D.の資格を持った学生が2~3年当社にて共同で研究を行い、大学に戻った後は当社との良いパイプ役にもなっている。

フランスとイギリスの両国に研究拠点があることは、欧州の研究機関との連携を強化する上で大きなメリットとなるが、一方で両国の政治・社会的変化の影響も少なからず存在する。

イギリスのEUからの離脱(ブリグジット)に関して、現時点では特に影響は出ていないが、EUプロジェクトへの参加資格の制限など今後の変化点を注意深く情報収集し対応を図る必要がある。

3. フランス並び欧州の文化について

日本ではよく“欧州”と一括りで語られることも多いと思うが、私にはフランスをはじめ欧州の国々はそれぞれ国の生い立ちも育まれてきた文化も全くの別物で、故に一括りではとても言えない感がある。

現在のフランスはかつてガリア地域と呼ばれ、紀元前1世紀頃から紀元5世紀頃のローマ時代の隆盛・衰退の歴史に文化の源があると考えられる。

ユリウス・カエサルのガリア平定とその後続く初代ローマ皇帝アウグストゥスの治世であった紀元1世紀頃の遺跡が今も南仏のあちらこちらで見ることが可能で、当時の文明開化を窺い知ることが出来る。ちなみに当社の敷地の中にもローマ時代の遺跡の一部が保存されている。

ローマ時代末期の北方蛮族による来襲や、その後の中世の領邦君主による地方自治の強化、そして近代になってのフランス革命へと歴史は続く。その背景も少なからず影響していると思われるが、近隣のどの国よりもフランスの国民は自己主張が強く、また国民の権利も守られている国との印象を受ける。

フランスが現代の国土の形(六角形からエグザゴンと称される)になったのは、18世紀のルイ15世の時代にロレーヌ地方を組み入れてからとまだ日は浅い。フランス王国のはじまりはカロリング朝からカペー朝へ転換される987年とする見解が一般的だが、その時代の南仏だけを見ても、中フランク王国、イタリア王国、ブルゴーニュ公国と支配者は次々と変わり、生き残るためには存在意義を示す自己主張や議論は不可欠であったとされ、フランス人の議論好きの所以にもなっている。

現代でもその流れを感じる事が多く、個人の意見や権利に対する主張は強く、また法律でもその点はしっかりと保障されている。従い労働裁判やストライキなども容易に起こりうる事象であり、日本でのマネジメントスタイルがそのまま通用するとは限らない。

ちなみに会社の通信環境を使い私的メールを送付することは日本では当然控えるべき事項だが、フランスで管理者側がその種のことを通達すると、会社資産を使い私的メールをすることはフランス国従業員に付与された当然の権利で、これを制限することは経営者側の明確な法律違反であるとの指摘が労働組合からなされる。所変われば、である。こういった自己主張や権利保障は一長一短あると思うが、ともすると流されやすい日本人気質や日本に居ると当たり前と思っていた事を冷静に見直す機会にもなっている。

話は少し横道に逸れるが、当社の位置するニースおよびブライトン、フランス・イギリス屈指の風光明媚な地域でもある。ニースに赴任してまだ一年にもならないが、生活面での面白みや気づきについても述べたいと思う。ニースというと皆さんは何を思い浮かべるだろうか。多分私もそうであったように、地中海のきれいな海岸を先ず挙げられると思われる。その通りなのだが、一方車で1時間も走れば様々な登山道の入り口に辿り着く。そこから数時間のトレッキングは感動的な景色の連続でもある(写真3)。

トレッキングをしているフランス人はとても多いが、途中すれ違う人々は皆挨拶を交わし、とてもフレンドリーである。そして何より話好きでもある。

休日にレストランに行くと、ランチでも2時間くらい話や議論をしてゆつくりした時間を過ごす。自然を愛し、コミュニケーションを大事にする文化は、見習うべき点も多い。



写真3 ニース近郊でのトレッキング風景

4. 今後の研究所の方向性について

昨今の厳しい自動車産業の変革期において、当社が将来に渡りアイシングループにとって存在価値のある研究所であり続けるためには、限りあるリソースを重点領域にフォーカスした運営が不可欠となる。しかしながらただでさえ視野が狭い傾向が強い研究者の視野をさらに狭くする危惧も内在する。あまり先の読めない混沌とした環境下において本当に必要となる新たな価値創造は、必ずしも狭い領域の深掘りだけでは達成出来ず、専門外の様々な知を融合することで専門領域における新たなブレークスルーが生まれると信ずる。

故に、先に述べたCNRSとの基本契約の締結も決して新たな領域を目指すためでは無く、これまで培ってきた当社のコア技術を融合させリソースを一本化させるとともに、視野を広げた知も融合させ、一段高いレベルでのブレークスルーを期待したものであることを付け加えておく。

最近アイシングループの研究法人の社長の方々や役員の方々と話す機会も増えた。多くの方は若い時に研究所での実務など長年研究所での経験を重ねられ、研究所がいかにあるべきかの考えを持っておられる。

一方小職は、2019年春に社長として当社に赴任するまでは、アイシン精機において入社以来、量産開発と先行開発の製品開発一筋で過ごしてきた。2018年末までパワートレイン先行開発部の部長として指揮してきたが、関わった3つの製品が2020年の東京オリンピックの会場並びにその周辺でお客様や選手を運ぶモビリティに採用されている。限定的ではあるが世には出せることになる。

テクノロジーは世で使われてはじめて価値が変わる、

私の信念である。この感覚を長年の研究スタイルを続けてきた研究員の方々に理解してもらうには時間がかかりそうであるが、出口戦略を見据えた研究所経営スタイルに変えていく所存である。

5. おわりに

研究所設立にご尽力された方々、また意志を受け継ぎ運営をされてこられた歴代の社長をはじめ研究所の方々に心より敬意を払い、設立の趣旨を尊重しながら、時代の変化に合わせた臨機応変な運営を図ってまいりたいと思っています。研究所生活初心者ですが、過去の製品開発で培った経験も活かしながら、従来とは異なった経営スタイルへもチャレンジしたいと考えておりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。私がこのイムラヨーロッパで関わった研究の一端が、引退後に実用化されて世に出たとの知らせが届くことを信じて。

(ご参考; 弊社ホームページアドレス)

<https://www.imra.eu/imra.eu/>

参考文献

- 1) 豊田稔 (アイシン精機編纂): 21世紀への科学・技術の調和的發展をめざして, 1992 年発行
- 2) 福井憲彦(株式会社PHPエディターズ・グループ): 教養としての「フランス史」の読み方, 2019年発行

筆者



戸嶋 裕基

IMRA EUROPE S.A.S.
社長